

令和六年十二月

交通安全全子供作文集

小・中学校児童生徒の作文第四十七集



簡単だけれど

大切なこと

一般社団法人

愛媛県交通安全協会

後

援

愛媛県教育委員会

は し が き

愛媛県交通安全協会・県内十八の地区交通安全協会では、愛媛県教育委員会の後援により、小・中学生を対象に、毎年交通安全に関する作文を募集しています。この趣旨は、小・中学生の情操教育に資するとともに、交通安全についての関心を高め、子供の交通事故防止を図ることを目的に、昭和五十三年から実施しているもので、本年は小・中学校合わせて百十六校から一千四百八十四編という多数の応募がありました。

応募作品について、地元の地区交通安全協会の第一次審査を経た七十二編の内から、愛媛県交通安全協会の第二次審査で三十九編選定し、更に愛媛県教育委員会に第三次審査をお願いして厳正な審査の上、愛媛県交通安全協会入選作文として二十五編を選んいただきました。作文は、子供たちが身近に体験したこと、家族や友達が交通事故の当事者になったことなど、広く交通安全の大切さについて率直に、かつ、切実に訴える内容となっております。

今回、入選作品二十五編を「交通安全子供作文集」第四十七集として発刊するに当たり、「愛」をシンボルマークとし、題名は、入選作品を代表して、大洲市立平野中学校二年生の向井希さんの「簡単だけれど大切なこと」とさせていただきました。この作文集が家庭、学校及び職場において、一人でも多くの方に読まれ、交通安全への関心と認識をより一層高めていただければ望外の喜びです。

応募していただいた多くの小・中学生の皆様には、感謝いたしますとともに、作文集発刊のために御協力いただいた関係者の皆様には、厚くお礼を申し上げます。県民の皆様には、今後とも交通安全協会の活動に御理解をいただき、一層の御支援と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和六年十二月

愛媛県交通安全協会入選作文目次

「小学生の部」

まの七さい	西条市立神拝小学校	二年	越智 咲菜	1
こう通あんぜんについて考えよう	松山市立石井小学校	二年	正岡 侑晟	2
一つしかない いのち	西条市立多賀小学校	三年	塩崎 悠人	3
あせらず、油断せずに	西条市立西条小学校	五年	梶田 梨央	4
その行動、大丈夫	西条市立橘小学校	六年	高橋 春香	5
交通事故0の願い	西条市立石根小学校	六年	日野 未唯奈	7
自分の命を守るために	西条市立田野小学校	六年	真鍋 こなつ	8
ぼくらの命を守るため	鬼北町立三島小学校	六年	小美永 ころ	9

「中学生の部」

交通事故の体験から考えたこと	西条市立西条西中学校	一年	伊藤 勇馬	10
油断は禁物	西条市立東予東中学校	一年	都谷 羽菜	11
交通安全について考える	松山市立垣生中学校	一年	江崎 心奏	12
免許返納について	松山市立鴨川中学校	一年	松下 遥香	14
「慣れない習慣」を	八幡浜市立松柏中学校	一年	上甲 彩葉	15
「もしも」を考えることで	八幡浜市立保内中学校	一年	兵頭 篤人	17
交通安全への願い	宇和島市立津島中学校	一年	濱田 芽生	18
その一滴で失う命	今治市立大島中学校	二年	寺岡 心來璃	20
ヘルメットが救ってくれた命	松山市立久米中学校	二年	大河 和	21
命を守るため	松前町立岡田中学校	二年	渡部 花菜	23
簡単だけれど大切なこと	大洲市立平野中学校	二年	向井 希	24
交通事故の体験から	愛南町立一本松中学校	二年	除本 雄星	26
二つの視点から見て気付いたこと	四国中央市立川之江南中学校	三年	高橋 和夏	27
「なぜ？」を考える	西条市立西条東中学校	三年	河野 壮一郎	28
安全を守るために	愛媛大学教育学部附属中学校	三年	齋藤 瑚	30
交通事故はすぐそばに	久万高原町立久万中学校	三年	村上 一花	31
交通事故を身近に捉えて	松野町立松野中学校	三年	細川 花音	33

愛媛県交通安全協会入選作文（二十五編）

【小学生の部】

まの七さい

西条市立神拝小学校

二年 越智 咲菜

あとすこしで三月十五日。三月十五日は、わたしの七さいのおたん生日。「七歳になったらじてん車にのってあそびに行つていいよ。」とお母さんとやくそくをしていました。ともだちはみんなじてん車にのってあそびに行つていたけど、わたしのたん生日は、三月、まだ六さい。いつもみんなのじてん車におくれないようにはしつてあそびに行つていました。だから、七さいのおたん生日をとてましたのしみにしています。「おたん生日おめでとう。」ついに、わたしのおたん生日が来ました。わたしは、さつそくともだちとじてん車にのってあそびに行くやくそくをしました。ヘルメットをかぶる。道をわたるときはとまる。お母さんに言われたことをまもつてあそびに行きました。

じてん車にのると、とつても気持ちがいいです。遠くまではしつてもぜんぜんつかれません。風がピューピューふいてとんでいる気分になります。じてん車はさいこうののりものです。わたしは毎日じてん車であそびに行くようになりました。

あるとき、いつしよにじてん車ではしつているともだちに、「もっとスピード出そう。」と言いました。「いいね。」と言つてくれたので、いつしよにビュンビュンじてん車をこいでいると、「キキーツ。」きゅうに小

さい道から車がとびだしてきました。びっくりして、いそいでブレーキをかけました。「ドン。」よこを見ると、ともだちが車にぶつかっていました。

わたしがスピードを出そうと言つたからだどうしよう。と思つてみると、車から女の人がおりてきて、けがをしていないか見てくれました。大きなけがはなく、わたしたちのことをとてもしんぱいしてくれました。ともだちがけがをしなくて本当によかったです。

家にかえつて、お母さんにこの話をすると、「まの七さいだね。」と言われしました。七さいは、こう通じこがとても多いそうです。

せつかくじてん車にのってあそびに行けるようになったさいこの七さいが、こう通じこでいたくてかなしいまの七さいにならないように、これまでにいじょうに気をつけようと思いました。



こう通あんぜんについて考えよう

松山市立石井小学校

二年 正岡 侑晟

ぼくは、八さいのたんじょう日に自てん車を買ってもらいました。はじめて道ををはしるので、お父さんといっしょに何回か道ををはしるれんしゅうをしました。自てん車をのるときはやくそくは「ヘルメットをかぶること」「右左をきちんと見ること」「スピードを出しすぎないこと」の三つです。だけど、時々ヘルメットをかぶるのをわすれてしまうので気をつけたいと思います。

夏休みになり、ぼくは自てん車でお母さんがしごとをするところへむかえに行くことにしました。やくそくごとをしっかりまもってむかえに行くことができました。でもそのかえりにじこにあいそうになりました。きゆうに車が出てきたのです。ぼくはびっくりとこわい気もちになりました。車はとてもスピードを出していました。なので車をうんでんする人におねがいたいことがあります。それは「ほそい道ではゆっくりはしること」「あぶないところでは一回止まること」です。ぼくも気をつけてうんでんするので、この二つのおねがいをまもってほしいです。

またこれは、ぼくが車にのっていた時の話です。自てん車用のしんごうきが赤なのにわたっているおじいさんがいました。でも、近くにいたけいさつかんの人はちゆういしませんでした。ぼくは「なんでちゆういしなんでしょう？」と思いました。じこにあわないためにもきちんと注意してほしいなと思います。

ぼくのように自てん車にのる人だけでなく、あるく人もじこにあわなないようにするために、みんなできよう力しあってじこのないえひめけんになりたいです。



一つしかない いのち

西条市立多賀小学校

三年 塩崎 悠人

ぼくは小さいころ、チャイルドシートのかたベルトが苦手で、泣いたり、かたをぬいたりして、お母さんをこまらせていました。ベルトで、体がしめつけられるのがつらかったからです。

その時、お母さんからこんな話を聞きました。

「ベルトをしていないと、交通事故にあった時に、事このしよげきで体を強く打ったり、体がフロントガラスをつきやぶって、外にほうり出されたりすることもあるよ。車の運転に気をつけていても、交通事故にあうこともあるから、一つしかないのちをベルトで守ってね。」

話を聞いた時、ぼくは、この話をこわいと思ったけれど、運転に気をつけているのに、なぜ事故にあうのかが分かりませんでした。

昨年、お父さんが車を運転して家族で出かけている時に、とつぜんお父さんが急ブレーキをふみました。前方横から、ぼくたちの車が走っていることをかくにんしないで、急に車がとび出してきましたからです。その時、ぼくは後部ぎせきでシートベルトをしていましたが、急ブレーキで体が前のめりになり、足も少しうきました。さいしょは何がおきたのか分からず、心ぞうがバクバク鳴っていました。とてもこわかったです。お父さんが前をきちんと見て運転していたので、事こにはならなかったし、だれもケガをしなかったので、本当によかつたです。

たです。

その後、お父さんから、車にのった時はかならずシートベルトを着けるぎむがあることと、六才より小さい子どもはチャイルドシートを使うぎむがあることを教わりました。ただ、ぎむであっても、後部ぎせきにすわっている人は、シートベルトをしていないことが多いそうです。

昨年、えひめ県で発生した交通事故は、二千百三十二けんで、四十四人が亡くなったそうです。その中で、十三人はシートベルトをするひつようがあつたのに、九人はしていなかつたそうです。インターネットで調べるとシートベルトをしているかどうかで、事故にあつた後のじよたいがかなりちがうことを知りました。

これらのことから、事故がおきないように気をつけることも大切なのですが、もしものことを考えて、いつもシートベルトを着けておくと、ぼくは強く思いました。車にのるのはほんの少しの間です。きゅうくつだから、といった理由でシートベルトをしないのではなく、大切な家族を守ってくれているのだと感しゃをして、これからも車にのるときはかならずシートベルトを着けます。そして、交通ルールを守り、自分や家族のいのちを守りたいです。

あせらず、油断せずに

西条市立西条小学校

五年 梶田 梨央

みなさんは、危険な思いをした経験はありませんか。また、交通事故などの現場を見たことはありませんか。私は一年生の時に経験したことがあります。

「あそこの道は、左右をよく確認して行くようにしてね。じゃないと交通事故にあつてしまうよ。」

友達の家に行く時は必ず、お母さんが真面目な顔でこの話をしてくれました。いつもは笑顔のお母さんが真剣な顔をして話してくれました。私は大事な話だと思ながらも、心のどこかで交通事故は私には関係ないと思っていました。あそこの道が危ないということは、一年生の私も知っていたけれど、普段から特に何も気にせず、お母さんから言われている言葉も思い出さずに通っていました。

「あそこの道、気を付けて行ってね。」

その日もいつものようにお母さんの話を聞きました。その後、自転車で友達の家に行こうとあの道を通る時、危ないということを知らない人が、何も気にせずに通っていました。

その時、事件は起きたのです。となりからいきなり、「キキーッ！」と大きな音を立てながら車が飛び出してきました。自転車に乗っている人は、焦った顔をして急ブレーキをかけました。あと少しのところで大事故になっていたのです。その様子を見ていた私は普段通っている道でこんな事故が起こりそうになるなんて思いも寄らず、びっ

くりしてしまいました。自転車の人が急ブレーキをかけていなければ、交通事故になっていました。車を運転していた人も本当に焦った顔をしていました。そのあと、車を運転していた人も、自転車に乗っていた人も、反省したような顔で頭を下げ、おたがいに謝っていました。

それを見ていた私は、毎日お母さんから言われているあの言葉を思い出しました。そして、この道は気を付けていないと、こんな目にあうんだな。お母さんの言っていることは本当なんだな。と、その時やっと心から思うことができました。事故が起こりそうになった道を通って帰る時、初めて左右確認して、気をつけながら帰ることができました。

その日の夜、お母さんに今日あの道であつた出来事を話しました。すると、お母さんは、「交通事故は自分が気を付けていても相手が気をつけていなければ起こることだよ。交通事故は取り返しのつかないことになることもあるから自分から気を付けようね。」

と話してくれました。そのことを聞いた私は、「私も気をつけないと。あのときは、車に乗っていた人も、自転車に乗っていた人もどちらも焦ったような顔をしていたから、どちらも油断をしてたんじゃないかな。」と思いました。

また別の日にこんなことがありました。友達と遊びに行き、あの危ない道を通ることがありました。私は友達に、「あそこの道、よく左右を確認してね。交通事故は油断している時に起きるんだよ。」

私は、お母さんが言っていることをまねして言いました。その時は車が来ていませんでした。

「確認しなくても事故になることなんてないじゃん。」

と友達に言われました。

「前、私は交通事故になりそうなところを見たんだ。本当に危なかったんだよ。」

と私が言うと、友達は何も言わずに道を通り過ぎていました。けれど、帰り道にはちゃんと気を付けて帰ってくれていました。友達は交通事故にあいたくなかったのかな、交通事故は油断している時に起きることを分かったのかな、と私は思いました。

交通事故はいつ、どこで起こるかわかりません。危ない道でも普段から事故が起こるわけではありません。自分は事故にあうことはないだろうと油断するのではなく、お母さんが毎回言っているように、「左右を確認すること」「曲がってくる車に気をつけること」をたたくさんの人に広めたいです。交通事故はけがで終わることもあれば、命を落としてしまうこともあります。私は、だれにもこんな経験はしてほしくないと思っています。みなさん、道路を通る時には、油断することなく安全に気を付けてください。



その行動、大丈夫

西条市立橋小学校

六年 高橋 春香

子どもの交通事故のニュースを見ることがある。どうして、子どもの交通事故が絶えないのだろうか。そこで、子どもが関わる交通事故について、警視庁のウェブサイトで調べてみた。すると、令和元年から令和五年の五年間で発生件数が約三七〇〇件、そのうち死者数は九人だった。私が思っていたよりも多くておどろいた。道路横断中や自転車に乗っているときの交差点での事故が多いようだ。さらに、このような事故は夕方の四時から六時ごろにかけて起こっているようだ。

その時間は、学校から帰って友達と遊んだり、家に帰ったりして、子どもだけで行動することが多い時間だと思う。そして、仕事から帰る人や車もたくさん通る時間である。飛び出しが危ないと分かっているにもかかわらず、遊びに夢中になったり、家に帰るのを急いでいたりして飛び出してしまうことがあるのかもしれない。

私の家の周りにも交通量が多い道路や信号のない横断歩道、横断歩道がない交差点など、事故が起こりそうなところがたくさんある。特に、近くにある国道は交通量が多いので、子どもだけで横断してはいけないし、横断歩道がないところはわたってはいけないと、いつも言われている。私は必ず大人といっしょに横断歩道があるところをわたるようにしている。そして、わたるときにはしっかり左右を確認して車が止まってから手を上げてわたるようにしている。

でも、私のお父さんは横断歩道がないところを走ってわたってしまふときがある。「車が来ていないかちゃん」と見たし、大人だから大丈夫。」と言う。そのとき、私は何も言わないけれど、心の中では「危ないな。近くの建物から急に車が出てくるかもしれないし、少し歩いたところには横断歩道があるのにな。」と思う。もし、子どもが同じことをしたら絶対しかるのに、大人がルールを守らないのはおかしいとも思う。

道路をわたるときは、大人も手をあげようと言われていたけれど、そうしている人はほとんど見ない。「横断歩道で待っていても、あまり車は止まってくれない。」と大人は言うけれど、私が手を上げて待っていると、きちんと車が止まってくれることが多い。大人は手を上げていないから、気付いてもらえないのではないかと思う。だから、大人も手を上げようという言葉のとおりになれば、車を運転する人は気付いて止まってくれるようになるだろう。

そして、車を運転する人は、思いやりの気持ちを持って運転するようにしてほしいと思う。もし歩いている人が自分の家族だったら、事故を起こさないように気を付けるのではないだろうか。だから、自分の家族が歩いていると思って運転すればいいと思う。

保育園児の妹は、私やお父さん、お母さんがすることを覚えて、何でもまねをする。何でもまねをするということは、悪いことでもまねをしてしまうということだ。大人がルールを守らないと、それを見ている子どももまねをして、ルールを守らなくなってしまいかもしれない。

子どもが関わる事故を少しでも減らすためには、私たち子どもも飛び出さないと、左右を確認するとか気を付けないといけないこ

とがたくさんあるけれど、大人も子どもと同じようにルールを守らないといけないと思う。子どもに交通ルールを守るように説明しても、説明する大人の方が守らなかつたら意味がない。大人だから大丈夫ということは絶対ない。「大丈夫。」と言って、ルールを守らないでいると、それが事故のもとになるし、子どもが事故にあう原因を作ってしまうことになる。事故にあったら痛いし、家族は悲しい気持ちになる。私は自分が事故にあつたら痛いのも、悲しい思いをするのもいやだ。そして家族に悲しい思いをさせるのもいやだ。

だから、これから私はルールい反をする人を見かけたら見て見ぬふりをせず、自分にできることをしたいし、自分も年下の子たちの良いお手本になるように、交通ルールをしっかり守る行動をしていきたい。



交通事故0の願い

西条市立石根小学校

六年 日野 未唯奈

私の家は国道沿いにあります。毎日、昼夜を問わずたくさん車が通ります。高速道路のインターチェンジが近いこともあり、トラックなど大型車の通りも激しいです。

幼い頃から両親や祖父母には、道に飛び出さないこと、国道は一人で渡らないことを厳しく言われてきました。そんな私は、五歳から近所のピアノ教室に通っています。場所は国道を渡つてすぐの所です。信号のない横断歩道を渡るのですが、高学年になり一人で歩いて行くことも多くなりました。その度に母は、「必ず右と左をよく見て、何回も車が来ていないのを確認してね。」としつこく言います。私は、もう六年生だし、そんなにしつこく何度も言われなくても大丈夫と思っていました。

そんなある日。いつものようにレッスンがあったので、ピアノ教室へ向かっていました。国道を渡る際には、左右を確認して車が止まってくれたので、渡ろうとしていたときです。反対車線の車が目の前を勢いよく通りました。私は、はっとして一瞬何が起こったのか分かりませんでした。ただただ怖かったことだけを覚えています。私は渡っているのだから、反対車線の車も止まってくれるものだと思い込んでいました。しかし、その思い込みが大きな事故を生むのだと実感しました。どんなに左右を確認していても、また片方の車が止まってくれていたとしても、もう片方の車が止まるのを確認すべきでし

た。母が何度も私に伝えてくれていた意味が分かり、涙が出そうになりました。

小学生は大人より小さいので、遠くの車からだとかかりにくい場合があるそうです。私は自らの経験から、どの小学生も横断歩道を渡る際、左右を何度も確認して、車がきちんと止まってから、手を挙げて渡ってほしいという願いがあります。そして、車を運転する大人にもお願いしたいことがあります。信号のない横断歩道の手前にも、道路上にひし形マークがあります。実際に私が事故を起こしそうなになった横断歩道の手前には、二つのひし形マークがあります。このひし形マークは、車を運転する人にもうすぐ横断歩道や自転車横断帯があることを示しています。このマークについて詳しく知らない人が多くいるようなので、運転する人にはぜひ知っておいてほしいです。少しの意識で交通事故は減らすことができるので、みんなが注意することが大切です。

このように、私自身が危険な体験をしたからこそ分かったことや感じたことがあります。国道に限らず、横断歩道を渡ったり、車を運転したりする全ての人にこの私の願いが届き、交通事故0の社会になってほしいです。



自分の命を守るために

西条市立田野小学校

六年 真鍋 こなつ

みなさんは、自分の命を大切にしていますか。わたしには命を大切にしようと思っただけで、忘れられない、けれど、二度と経験したくないという思いがあります。それは私が四年生のときのことでした。

下校していると、道路に人だかりができていました。何かあったのかなと思っていると、私に気づいた姉の友達が集まってきました。「お姉ちゃんが交通事故にあったんよ。」

と知らせてくれました。びっくりした私は急いで人だかりのところに行きました。そこには、こわれた自転車と、口や鼻から血を流している姉がいました。私はパニックで泣いてしまいました。そこにいた女性が声をかけてくれ、家にいるはずの母と一緒に知らせに帰りました。

あのあとどうなったのか心配になった私と母は、父と連絡を取り合いながら姉の運ばれた病院へ向かいました。幸い、姉は骨折をしたり傷をぬうような大きなけがではなかったため、安心しました。

事故現場で、警察や運転手の人と話をした父の話では、事故は、姉が自転車で道路に飛び出したところへ、スピードのついた車とまれなくてぶつかったということでした。

家に帰ってきた姉は、飛び出してしまったことを深く反省していました。けがが治り学校に行けるようになるまで、

「早く学校に行きたい。」

と、毎日言っていました。しかし、けがが治っても事故のことを思い出すと学校にはなかなか行けません。友達や学校の先生が声をかけてくれてやっと学校に行くことができるようになりました。

以前のような生活がもどり、事故のことは終わったと思っていました。ところが、まだ終わってはいませんでした。姉の心には傷が残っていました。それは、『救急車の音』です。救急車のサイレンの音を聞くことがトラウマになってしまったのです。姉は、どんな場所でも、どんなときでも、救急車のサイレンが聞こえると耳をふさぐようになったのです。そんな姉を見ると、私も胸が痛くなります。早く以前の姉にもどれるようにいえることしかできません。

今回のできごとを通して、私は、命を守ることは大切だな、命を守ることをいつでもできるようにしないといけないと強く思いました。どんなに急いでいても、大きな道路に出るときや曲がり角では一度止まっています。自転車に乗るときは必ずヘルメットをかぶっています。当たり前のことしかしていませんが、自分や大切な家族を悲しませないためにも、しっかりと交通ルールを守っていききたいと思えます。



ぼくらの命を守るため

鬼北町立三島小学校

六年 小美永 ころろ

ぼくの地域には、「見守り隊」があります。「見守り隊」とは、通学班の子どもたちといっしょにバス停まで歩いて見守ってくださいる人や、畑仕事や犬の散歩中にぼくたちに声をかけて見守ってくださいる人など、ぼくたちが元気に安全に通学できるように見守ってくださいる地域の人たちのことです。ぼくは、地域の人たち、交番のおまわりさん、学校の先生、家族に見守られて、毎日事故もなく学校へ通うことができることに感謝しています。

でも、心配な場所があります。ぼくが毎日利用しているバス停の近くの道断歩道は、カーブを曲がったところにあつて、信号機がありません。横断歩道をわたろうと待っている人がいるときに、スピードを落とさずにカーブを曲がってきて素通りする車もいて、「危ない。」と思つたことが何度もあります。逆に、子どもが飛び出したこともあつて、車の方が、「危ない。」と感じることもあると思います。なぜ、こんな危ない場所に信号機がないんだろうと疑問に思つたので、インターネットで調べることができました。すると、いくつかの条件がそろわないと信号機を設置することができないことが分かりました。信号機を設置したくても、利用する人の「危ない。」という声だけでは実行できないということを知りました。

夏休み中に、軽自動車と路線バスが正面しよう突したという交通事故のニュースをテレビで見ました。状況はよく分かりませんが、母

親は足のけがですみましたが、後部座席に乗っていた七才と五才の姉妹がシートベルトを着けていたのになくなってしまったそうです。交通事故は、自分が交通ルールを守っていれば絶対に大丈夫、ということはありません。みんなが相手のことを思つて、交通ルールを守っていかなければならないと思います。

ぼくにできることを考えました。自転車に乗るときには、必ずヘルメットをかぶること。ヘルメットをしないで転んだら最悪の場合、なくなってしまうかもしれません。ヘルメットをかぶっていれば、生き残る確率が上がります。

自転車で道を横断するときには、車が止まってくれると思わないこと。見通しの悪い道路では、車が人に気付かず、止まってくれないかもしれません。車が止まってくれると思つていて止まってくれなかつたら、ひかれてしまうかもしれません。

自転車に乗る前には、点検をすること。もし、どこかのねじがゆるんでいて、とちゅうで部品が外れてしまうと、交通事故になるかもしれません。

交通ルールを守るためには、面倒くさいこともあるけれど、結局は自分の命を守ることにつながります。面倒くさいに命は代えられません。みんなが安全に暮らしていけるために、交通ルールが作られています。事故で悲しい思いをする人が少しでも減るように、ぼくにできることをやっていきたいです。ぼくは、自分の命を守るために、そして、相手のことを思いながら、しっかりと交通ルールを守っていきます。

【中学生の部】

交通事故の体験から考えたこと

西条市立西条西中学校

一年 伊藤 勇馬

今から四年ほど前、僕は交通事故に遭いました。その当時僕は小学三年生で、友達と一緒に、別の友達の家で自転車遊びに行く途中でした。友達と楽しく話しながら道路を走っていて、十字路に差しかけたその時です。右側から走ってきた車と接触しました。どんっという鈍い音と共に、僕は道路へ投げ出されました。突然の出来事で、あまり詳しくは覚えていませんが、耳鳴りがして、鼻と口から出血していました。目の前にパトカーと救急車が来て、泣いている友達が見えました。

幸い、大怪我ではなかったのですが、僕の命に別状はありませんでした。しかし、今でもその時の傷跡は僕の体に残っており、事故の衝撃や記憶がトラウマとなっています。

僕が大怪我をせずに済んだのは、ヘルメットをかぶっていたからです。かぶるのを面倒に感じることもありますが、あの時ヘルメットをかぶっていなかったら、と思うとぞっとします。最悪の場合、死んでいたかもしれない。ヘルメットが僕の命を守ってくれました。今までは他人事のようにしか感じていなかった交通事故が、自分に起こって初めて現実味を帯び、ヘルメットをかぶることの大切さを実感しました。事故は、本当に恐ろしいです。

もう一つ大切に思ったことは、曲がり角など、見通しが悪いところで

は特に注意して、ミラーを見ることです。事故当時の僕も、多分、ミラーは見ていたと思いますが、絶対に車やバイクが来ていないかを確認できていたかと問われると、自信がありません。きっと、油断していたのだと思います。それと、ミラーを確認すると共に大切なのは、左右を目視することです。今思えば僕の場合も、停止線できちんと止まって左右の確認をしていたら、事故は防げていたかもしれません。

この経験から、道路に書かれている表示や標識に無意味なもの無く、道路を使うすべての人がルールとして守るべきものと強く感じました。

事故に遭うことは、滅多に無いかもしれませんが、そのため、僕のように油断してしまう人も多いと思います。朝、学校へ行く前に親から「気を付けて行きよ。」と念を押されますが、正直聞き流していることがほとんどです。でも、事故は起こってからでは遅いのです。命は大切に重たいものですが、ちよっとしたことでも失われてしまうこともある、脆い存在です。だからこそ、僕たちは毎日の登下校を初めとする日常生活の中で、危険に対して注意深くあらねばなりません。僕はこのことを、今まで事故などの不幸に全く縁のない人にも、声を大にして伝えたいです。

それから、車を運転する人にも考えてほしいことがあります。歩行者、自転車の走行者にとっては、車は怖い存在です。その半面、車の運転者に対する甘えかもしれませんが、僕たちをよけてくれるだろう、と心のどこかで思っているところがあります。自分の自転車すれすれのところを、結構スピードを出している車が通り過ぎていくと、ひやっとします。僕たちも車の邪魔にならないように気を付けますが、車を運転する人にも、十分気を付けてもらいたいです。

それから、以前から気になっているのが、スマートフォンを見ながら運転している人がいることです。さすがに運転中に電話をしている

人は、あまり見かけませんが、赤信号で止まっている時や、走行中でも、下を向いている人がいます。正直、前を見て運転して、と言いたくなりません。罰則が強化され、走行中の通話は控えるようになってきたのは良いことだと思えますが、スマートフォンに意識が向いていると、運転の操作や判断を誤らないとどうして言えるでしょうか。歩行者や自転車に乗る者から見ると、腹立たしさを感じます。ルールを守っている真面目な運転者も、同じことを思っているかもしれません。僕たちは、左側一列での走行、ヘルメットの着用、道路標識を守ることを心掛けて、安全に対する意識を高めます。だから、車の運転者さんたちも、お互いの人生が不幸にならないために、周囲が不安を感じるような運転はやめて、安全第一でお願いしたいです。スマートフォンのことについて述べましたが、これは自転車の運転者も同じです。まだ中学校生活が始まったばかりですが、数年後、高校生になった時の僕にも、しっかりと言い聞かせたいです。スマートフォンを見ながら、運転しては絶対にだめだ、と。交通安全については、歩行者、運転者それぞれの立場で考えること、守るべきルールがあります。まだ始まったばかりの中学校生活を楽しむためにも、交通安全に気を付け、交通ルールを正しく守って自転車に乗りたいです。



油断は禁物

西条市立東予東中学校

一年 都谷 羽菜

「一瞬なら。一度なら。」
だけど、その一瞬、一度の油断が命をなくすことにつながってしまうかもしれない。

最近、ながら運転のニュースをよく見聞きする。実際、車を運転している人も、歩いている人も、自転車で乗っている人も、たくさんの人が手に持ったスマートフォンに夢中になっている姿をよく見かける。

部活が終わり、私が自転車で下校していたとき、交差点から一台の車が飛び出してきた。その車とぶつかりそうになった私は、急いでブレーキをつかんだ。その車の運転手もスマートフォンを片手に持っていた。以前、私の家族が事故に遭ったときは、相手は一時停止をせずに家族の車に突っ込んできた。この事故で小さい頃からの思い出がたくさん詰まった車を手放すのはさみしかった。でも、家族の命を守ってくれたこの車には感謝している。このような体験を通して、一人一人の少しの油断が多くくの被害者を出してしまうこと、そして、たくさんさんの悲しみを生んでしまうことを実感した。

私は中学校入学と同時に徒歩通学から自転車通学となった。それに伴い、スピードを出し過ぎていたり、よそ見をしながら自転車に乗っていたりする人を度々見かけるようになった。事故に遭ったという話もよく耳にする。私自身も、友達と一緒に登下校している際に

左右確認を忘れて車とぶつかりそうになったり、友達との話に夢中になってよそ見をしてしまったりと、小学生の時より危ないと感じることが増えた。そのため、交通ルールを守ることは大切なことだと心から実感するようになった。地域の方々は私たちが安全に過ごせるよう配慮してくれている。横断歩道で見守ってくれていたり、危なかったら注意をしてくれたり、車を端に寄せてくれたりと、様々な場面で私たちの安全に気を遣ってくれている。だからこそ私たちも、急いでいてもスピードを出し過ぎないように、しっかりと交通ルールを守って交通事故に遭わないように心がけていくべきである。油断して交通事故に遭ってからは手遅れだ。だから、「あるとき交通ルールをきちんと守っていけば。」と後悔しないためにも、正しい交通ルールやマナーを守ることの大切さを再確認し、周囲に伝えていきたい。そして、交通事故はいつ起こるかもしれない、という危機感を常に持って登下校していきたいと思う。また、私の家族は、運転中の事故を防ぐために、車を停めるときや駐車場に入るとき、せまい道を通るときは運転手に話しかけないように心がけている。こうすることで危険なところでも以前より落ち着いて安全に通ることができるようになった。

これからも毎日自転車での通学は続くし、家族の車に乗る機会も多い、そして、大人になれば自分が車を運転するようになるかもしれない。だから、今のうちから運転中は油断をせず、しっかりと交通ルールを守り、中学校生活三年間を楽しく悔いのないよう過ごしていきたい。

交通安全について考える

松山市立垣生中学校

一年 江崎 心奏

私は子供に一番身近な乗り物は、自転車だと思います。小学校くらいから乗ることができるし、友達の家遊びに行くときなど子ども一人で気軽に乗ることができるからです。身近な乗り物だから子どもの自転車での事故はとても多く、一年間で約七万件起きているそうです。

そんな自転車を運転するときに私が大事だと思うことは全部で三つあります。

一つ目はライトをつけることです。これは習い事とかで夜に自転車に乗るときに車に自分がいることを知らせることができるし、暗い道で水路や障害物に気づくためにも大事です。

二つ目は「ながら運転」をしないということです。スマホを使いながらや、音楽を聴きながら運転すると、ハンドルがぶれたり、自動車の音が聞こえなかったり、前方不注意になって危険に気づくことが遅れるからです。

三つ目はヘルメットをかぶることです。ヘルメットは事故をしたときに頭を衝撃から守ってくれるとても大事なものだからです。

私は、小学生の時に坂道を自転車を下ついているときに車止めにつかかって怪我をしたことがあります。その時ヘルメットをかぶっていなかったため頭を打って、頭に少し怪我をしてしまいました。頭を打っていたのでお母さんはとても心配してすぐ病院に連れていってくれ

ました。大した怪我ではなかったけれど夜中に急変しないかその日はひやひやして心配だったそうです。自分の大切な人を悲しませたり心配させたりしないためにもヘルメットで頭を守ることがはとてとても大事だと実感した出来事でした。

二〇二三年四月には道路交通法が改正されてヘルメットの着用が努力義務化されています。素晴らしいことに愛媛県はヘルメットの着用率が日本一だそうです。全国平均が一三・五パーセントなのに対して愛媛県は五九・九パーセントとなっています。

そこで私はなぜ愛媛県はヘルメットの着用率が高いのだろうかと思つたので調べてみました。すると、二〇一四年の十二月に下校中の高校生がトラックにはねられて亡くなった事がきっかけで普及に向けた取り組みが進んだことがわかりました。着用率が高いわけを知つて私は、事故があつたから高いのはちよつと悲しいなと思いましたが、その悲しみを次の事故をなくすための力にできているのはすごいなと思えました。事故でこれ以上悲しい思いをする人を出さないためにみんなを取り組んでいくことはとても重要です。でも、この事故のことを知らない人は多いし、大人の着用率はまだまだ低いと思いません。

私は大人の着用率が低い理由は、見た目がかっこ悪いことや大人はかぶらなくても大丈夫という考え方があるからだと思えます。今はかぶりやすいように帽子みたいなデザインのヘルメットもあるのかぶつてみてほしいです。大人がヘルメットをかぶれば子どもも見本にもなります。事故はいつどこで起こるかわかりません。まずは自分でできることから始めてほしいです。交通ルールを守ることがはとて重要ですが、自分で事故を防げる、対策できることはたくさん

あると思います。知らない間にスピードを出しすぎているか注意したり、ライトはちゃんと点くか、自分の体格にあったサドルの高さか、ブレーキはこわれていないかなど日々の点検も大切にしていきたいと思います。



免許返納について

松山市立鴨川中学校

一年 松下 遥香

今年の春、私の祖母が運転免許証を返納しました。祖母は今年八十三歳で、毎日外出したり、体操に行ったりと、とてもアクティブな人です。運転免許返納前は、毎日のように車に乗っていました。

そんな祖母を心配して、私の両親はいつも「もう車に乗るのは危ないから、やめてほしい。」

と言っていました。祖母は

「ゆっくり運転するから大丈夫。それに車がないと、買い物や外出に不便だから、返納はしない。」

と答えていました。私は両親が不在の時に、習い事の送り迎えを、祖母にもらっていたので、危ないなど感じる事が何度かありました。祖母に送り迎えをしてもらえなくなるのは少し困る気がしましたが、私も両親と同じ気持ちでした。

ある日、習い事の帰り道に祖母に、

「おばあちゃん、お父さんや、お母さんが、運転をやめるように言っているのを、どう思う？」

と聞いてみました。返事は、父や母に言っていることと同じでしたが、それに加えて、「はるちゃんが習い事をやめるまでは、送り迎えをしようと思っているから。」

と言いました。それを聞いて、私の為でもあるのかとおどろきました。

その日の夜に私は両親に、

「習い事の行き帰り、中学生になったから、自分で自転車で行っていい？」

と伝えました。両親はおどろいていましたが、私は自分のできるところをして、危ない運転をしている祖母が、免許返納しやすくなるように協力したいと思ったのです。

そんな私の話を聞いて両親も免許返納後にどうすれば祖母が、今まで通りの生活ができるのか考えるようになったそうです。

そんなある日、あれだけ運転免許返納を、嫌がっていた祖母が母に、「運転免許証の返納はどこでするの？」

と聞いてきました。何があったのか聞くと、毎朝車で行っているラジオ体操の帰り道、家の塀に車をぶつけてしまったそうです。ゆっくり運転していたこと、朝早いので人がいなかったことから、けがをした人は祖母も含めいなかったとのことでしたが、通れると思ったところが通れなかったこと、ブレーキが間に合わなかったことがショックだったそうです。

「思ったように運転できないのが怖い。」

「誰かにけがをさせてしまう前に、運転をやめることを決めたんよ。」と話してくれました。

祖母が運転免許返納を希望したときにどうするか、両親は事前に考えていたので、スムーズに返納でき、その後の祖母の外出や、体操の送り迎えのフォロー、電車やバスの利用などの案内もできたと言っていました。

運転免許返納には、今まで通りの生活ができなくなるかもしれないデメリットがあるけど、ニュースなどで高齢者の運転による事故を見るたびに、返納してくれてよかったですと感じました。

これからも自分ができることで祖母を助けて、返納した後の不便を感じさせないようにしていきたいです。



「慣れない習慣」を

八幡浜市立松柏中学校

一年 上甲 彩葉

七〇九一件の増加。これは、令和五年度の交通事故統計で示された、全国の交通事故発生件数の前年度比だ。この数字を目にした私は、事故を防ぎ自分の命を守るために、これから意識していくべきことについて考えてみた。

私は、今年の四月に中学校に入学したのを機に、自転車通学を始めた。初めのころは、カバンの重さでバランスがとりづらかったり、道に慣れていなかったりして、用心深く慎重に運転していた。でも、だんだんと日が経つにつれて、自転車通学にも慣れていき、その時間帯の交通状況や周辺の様子などが分かるようになってきた。

そんなある日、右側から車が来やすい場所を通る際に、つい右側だけを確認して進んでしまい、左側から車が来ていることに気付かず、ヒヤッとしたことがあった。いつも右からしか車が来ないからと、その時も右から来る恐れがあると思いつき、左から来る可能性を考えていなかった。いわゆる「慣れ」とともに、慎重感が薄れていた頃の出来事だ。幸いにも、車のスピードが出ていなかったため事故にはつながらなかったが、私はこの経験から「慣れ」からくる油断が事故やけの原因になることを実感した。

他に、どのような原因で交通事故が起きているのか調べてみることにした。すると、JAFの記事に「二〇一五年からの五年間に全国各地で発生した車と歩行者の衝突による死亡事故は五九三一件で、

その約七割が歩行者の横断中の事故だった。さらに、その七割が横断歩道以外の場所を横断していた際に発生した。」と書かれていた。これも、「横断歩道以外の場所を何回か渡って大丈夫だった。」という経験が、慎重さを失う原因となっているのだと思う。また、車の運転手も、横断歩道を通過するとき比べて、それ以外での歩行者の横断に対する意識が低いため、この行為は大変危険だと感じる。

実際に、私が父の車で塾から帰宅途中に、事故現場に遭遇したことがある。父は車を止めて駆け付け、倒れていた人にAEDを使用する必要があるか、心臓の動きや反応を確かめた。すぐに、ぶつかつた車の運転手が呼んでいた救急車が到着し、救急隊員に引き継いだ。父は職場でAED講習を受けており、その場で適切な判断ができていた。私も、学校でAEDの使い方を学んだばかりで、その意義を思い知った。後日、その事故も歩行者が横断歩道のない場所を横断して起こつたのだということを知った。

また、「ながら運転」の危険性についても最近よく耳にする。以前、自転車をこぎながら携帯電話を見ていて、すれ違おうとする私の存在に気付かない人がいて困ったことがあった。車で通勤している母にも聞いてみたところ、「あー、おるよ。今日も見かけたよ。」と言っていた。きっと、その行動も最初は緊張感を持っていたと思うが、徐々に慣れてしまつて抵抗がなくなっているのだと思う。慣れた道であっても、急いでいても、交通ルールを守らなければ、事故を減らし、なくしていくことはできない。

このような行動は、軽い気持ちから、そして「慣れ」から起こる。そのたった一つの過ちで、大切な命を奪う可能性がある。私も、いま一度自分の交通安全について見直し、決して毎日同じではない道路

状況に注意を払う意識を持ち続けたい。そして、自転車通学を始めた頃の感覚や気持ちを思い出し、「慣れない習慣」を身に付けて過ごしていく。



「もしも」を考えることで

八幡浜市立保内中学校

一年 兵頭 篤人

僕の家の周辺は、住宅地だ。そのため市道が多い。それらは道幅がせまく、歩道と車道の区別がなされていない。小学生のときから、登校班で「二列以上にならないようにする」ことがきまりになっていて守らないといけなかった。道がせまいから、他の通行人や車の邪魔にならないようにするためだ。

しかし、僕たちがきまりを守っていても危険は多い。道がせまいのに、車の通行量も多い上、スピードをかなり出している車が多いのだ。僕たちは車が通るたびに道の端に寄って、車の通り過ぎるのを待たなければならぬ。

そのような僕たちの登校の安全を見守ってくれるために、たくさんの人たちが関わってくださっている。毎朝、旗振り当番として立ってくれている保護者の方や、学校の先生方。特に、信号や横断歩道のところでは、たくさんの人や車が集中するため、安全に道を渡ることができるよう、車を止めたり、ぼくたちに注意を促したりしてくれる。そこを越えれば、スクールゾーンや歩道橋、歩道の設置がされているので、安全に登校できる。

しかし、そのような場所でも危険な目に遭い、ヒヤッとする時がある。それは、車や自転車のスピードの出し過ぎである。まるで僕たちの姿が目に入っていないかのように、僕たちのそばを通り過ぎる時も、かなりのスピードを出していることが多い。狭い道で、実際

避ける場所がないところもある。そのような場所では、マナーとして減速してくれると僕たちは安心して登校できるのに、と思う。

また、自転車の並進やスマートフォンを使いながらの運転も僕たちを危険にさらす原因になっていると思う。自転車を運転することに集中していないため、進行方向や周辺に気を配ることができず、気づいたときにはぶつかっていた、ということになりかねない。

このようなことがたくさん起こるようになり、最近は大変なドライバーの必要性がさげられるようになった。それは、あおり運転や高齢の方による事故、飲酒運転などがよく報道されるようになり、社会問題として取り上げられるからだ。しかし、報道されるのは、そういった事件性の高いものばかりで、大人対大人の場面が多いように思う。被害者が子どもとなると、さらに大きく報道されることもあるが、子どもが日常的な危険にさらされていることについては取り上げられることは少ない。

では、なぜ大人がそれだけいろいろな危険行為をしてしまうのか。大人は様々な経験をして年を重ねるだろうから、その経験から危険は予測できるはずだ。しかし、一向に事故は減らない。

そこで、僕は、そうなる原因について考えてみた。その原因は「人の心」にあると思う。たとえば、あおり運転。周囲の車の運転に力チンときて、嫌がらせをしてやろうと周囲の車を危険にさらしてしまうのだが、その行為をする前は、その人はきちんと運転していたはずだ。それなのに、一瞬の腹立たしさで人を危険にさらす行為に及んでしまう。

スピードの出し過ぎも同じだ。時間に余裕が無くなると、心にも余裕が無くなる。自転車の並進も、自分の楽しさを優先する心、スマー

トフォンを使いながらの運転も同じだ。

そう考えてみると、もう一つの共通することに思い至る。それは、「もしも」を考えて運転していかないということだ。スピードを出す人には、出す人なりの理由があるのかもしれない。たとえば、大事な会議に遅れそうだとか。しかし、そうなってくると「もしも」を考えられなくなったり、「もしも」が軽くなったりしてしまう。

車や自転車運転は危険と隣り合わせだ。危険と隣り合わせということは自分や周りの人の命とつながっているということだと僕は思う。「周りの人の命」には、運転者の家族も含まれると思う。そういった自覚を強く持つ事が大事なのではないかと思う。

ここまで、車や自転車を運転する人たちのことばかりを書いたが、危険を冒すのは実は僕も同じだ。僕は以前、横断歩道で左右をよく確認せず道路を渡ってしまい、危うく車にぶつかるところだった。スイミングスクールまで送ってくれた母の車から降りて、横断歩道を渡った時のことだった。僕は、泳ぐのが楽しみで、安全を確認するということを怠ってしまい、そのせいで危険な目に遭いそうになった。車の中から僕の様子を見ていた母は肝を冷やしたそうだった。母からは、その後、なぜ左右確認しなかったのか、とひどく怒られた。僕も「もしも」を考えなかった一人なのだ。

僕自身もこれから通学で自転車を使ったり、大人になって車を運転したりするようになると思う。そのような時に、「心に余裕を持つこと」「もしも」を考えること」を心がけ、交通安全に気をつけて生活していきたい。

交通安全への願い

宇和島市立津島中学校

一年 濱田 芽生

私は、両親や姉の運転する車と一緒に乗っている時、たまにドキッとすることがあります。前を走行している車が、ウインカーを出すのが遅く、ブレーキランプが点いたと思ったら急に止まったり、後ろの車の車間距離が近すぎたりする時などです。そのような状況になると、こちらもイライラして運転に支障をきたすことがある様に思います。

私は交通事故について考えた時に、いつも母方の祖母のことを思い出します。祖母は今から四十年前、私の母が小学六年生の時に交通事故で亡くなりました。当時、祖母は三十五歳でした。母が運動会の練習を頑張っていた秋の季節、給食が終わり、ゆっくりと昼休みを過ごしていた時に学校へ事故の電話が入り、母は担任の先生に付き添われて急いで市立病院へ向かったそうです。対面した時にはすでに脳死状態だったそうです。無数の管が通された身体がモニターに囲まれ、眠り続ける祖母を目の前にしても母は何が起こっているのかわからず、他人事のように、夢なのか現実なのか、映画やテレビドラマでも見ているかの様だったと聞きました。もし今、自分が母の立場になってしまったらと思うと、絶望と悲しみで胸が張り裂けそうな気持ちになります。

祖母は、原付バイクで通勤していました。当時はヘルメットの完全義務化はされていなかったため、祖母はヘルメットをかぶってい

なかったようです。職場の昼休憩で自宅に帰って昼食をとって、再び仕事場へ向かう時の出来事でした。国道の左カーブの道を走行中、反対側から右折してきた四トントラックにはねられ、頭を強く打って、脳挫傷でした。一瞬にして母や祖母の世界は真っ黒になってしまいました。もし、ヘルメットをかぶっていたら助かったかもしれないのに、あと数分、事故現場を通る時間がずれていたら助かったかもしれないのに……。しかし、現実はあるかないものでした。失われた大切な祖母の命はどんなに願っても蘇る事は無く、諦めるしかありませんでした。母は交通遺児として祖父母と暮らしながら、事故現場を通るたびに苦しみ、加害者を恨み、憎しみました。死を受け入れるまでには本当に長い時間がかかったそうです。当時は、ニュースや新聞にも取り上げられていた祖母の事故ですが、いつの間にか忘れ去られて消えてしまいました。事故を風化させないためにも、私は母の体験を通して、まず自分の身近なところから交通安全について考えてみようと思いました。

私の住んでいるところは、目の前に国道が通っており、昼も夜も交通量が多く、片側一車線で道幅も狭い、交通事故の多い場所です。カーブも何か所もあり、見通しが悪いので、四十キロの速度規制もされています。しかし、自営業の方たちは、山側の自宅から海側の作業場へ行くために国道を横断しなければならず、私も作業をしている両親に用がある時にはよく渡っています。最近やっとな横断歩道ができましたが、それでも時々驚く場面に遭うことがあります。先日にも横断歩道で車が停車してくださったので、私が渡ろうとした時、その後ろの車がいきなり追い越してきて、私はもう少して轢かれる所でした。止まってくださった車の運転手さんも驚いたに違いあり

ません。スピードも出ていて、とても怖かったです。しっかりと慎重に左右を確認して横断歩道を渡ろうとしても、あつという間に車が来て、渡れないこともあります。そんな時には「きまりを守らない車を通るのだったら、制限速度も横断歩道も意味ないのじゃないのかな。」と黙ってしまいます。

亡くなった命は諦めるしかない。それはあまりに悲しすぎます。祖母の事故を風化させないために私たちが出来る事は交通ルールをしっかりと守り、運転する人たちは人が飛び出してくるかもしれないなどと想像して気を付けることだと思います。そうすることで事故を防ぎ、助かる命もあるかもしれません。

祖母が生きていたら今、七十六歳です。写真では三十五歳の時のままだけど、どんなおばあちゃんになっていたのか会ってみたかったです。加害者の方は、今も祖母のことを思って事故を思い出し、安全運転をしてきているのだろうか。いや、そうであって欲しいと切に願います。



その一滴で失う命

今治市立大島中学校

二年 寺岡 心來璃

ある朝、事故のニュースを見た。それは、飲酒運転の事故だった。走っていた車両にぶつかり、その後逃走しようと時速七十キロメートルほどで走っていた。変圧器に衝突して止まったという。この事故で一人の尊い命が奪われることとなった。

今は昔と比べて色々と便利なものが増えてきている。スマートフォンやタブレット、パソコンなど、私たちの暮らしをより楽にしようとする様々なものが開発されている。

その中でも車の普及率は、一九六七年ごろは十パーセント以下だったのに、一九九五年では八十パーセント以上になり、大幅に増えている事がわかる。

車が普及し、移動方法が増えて便利になったが、事故に関するニュースが多くなったように感じる。雨や雪が原因で起こるスリップ事故、アクセルとブレーキの踏み間違いなどで起こる衝突事故や転落事故などである。

その中で私が気になっているのは飲酒運転による事故だ。車に乗る直前に酒を飲んでいなくても、吐いた息のアルコール濃度が〇・一五ミリグラム以上あれば飲酒運転となる。

だから、前日に酒を飲んでいて、まだ酔いがさめていなかったら飲酒運転になる可能性が十分ある。そのことを知らなかったというだけで許されたりはしない。

飲酒運転に関する事故の例をインターネットで調べてみることにした。そうすると、気になる事故が一つ出てきた。

福岡県福岡市の交通事故だ。この事件で三人の子供が亡くなった。家族で車に乗って出かけていたところ、飲酒運転をしていた男の人がその家族の車に時速百キロメートルで追突し、海の中に転落させた。そのため、幼い子供達はおぼれて亡くなった。その後、追突した車の運転手は、飲酒運転の発覚を恐れて逃走し、水を大量に飲んで証拠隠滅を図った。

私は、この事故の記事を読んで思ったことがある。それは、酒は人の理性を奪うということ。そして、車は使用の仕方を間違えると恐ろしい凶器になるということ。摂取の仕方をしっかり考えて、ルールを守らないと何をするか、どうなるかわからない。自分勝手な無責任な行動で周りに迷惑をかけたたり、他人の人権を奪ったりすることをしっかり頭に入れておかなければならない。

それと同時に車の使用方法についても改めて考えてみる必要がある。自分が買った物だからといってルールを守らなくていいわけがない。日本には日本の交通ルールがある。それは全ての人が安全に暮らすことができるようにつくられたものである。それを守らないと謝罪だけでは済まされないことになりかねない。人の命を奪うとすれば絶対に許されないことだ。

飲酒運転で事故を起こしたニュースで流れる「お酒を飲んでいたので分からない。覚えていない。」という言葉。酒を大量に飲むと記憶がなくなることがあるという。しかし、そう言うのは、「全部酒のせいだ、自分は悪くない。」と言っているようにしか聞こえない。たった一滴といえども、飲酒をした限り、責任は自分にある。

私は改めて交通ルールについて考えた。人に迷惑をかけないようにしよう。人生を無駄にしないようにしよう、と改めて決意した。

これからも事故が起きないように、自分にできることは全力で実行していきたい。そして、安全に気をつけて、命を大切にしていきたい。



ヘルメットが救ってくれた命

松山市立久米中学校

二年 大河 和

脳挫傷、外傷性くも膜下出血、右急性硬膜下血腫、右頭蓋骨骨折、頸椎捻挫。これらは、つい二か月前に、私が交通事故で負った外傷の全て。自転車、ヘルメット、そしてそれまで当たり前だった日常。これらは、その事故によって一瞬で壊れ、変化してしまった。

二か月前の事故のせいで、私は以前のように、所属している吹奏楽部でクラリネットを吹くことも、自転車で通学することも、今はできない。体育の授業、友人と遊ぶ約束、家族で行く予定だったバレーボールネーションズリーグ福岡大会。他にも小さなことも数えれば、数えきれないほどたくさん大切な時間を失ってしまった。

当日朝の登校時間、自転車に乗っていた私は、小さな交差点で出会い頭に車と衝突し、救急車で運ばれたそうだ。「運ばれたそうだ」というのは、事故当時、私は意識がなく、二か月たった今でも、その日のことを全く思い出せていないから。

近くにいらつしゃった先生や、ご近所の方々の助けで救急車で運ばれ、それから二週間入院した。最初の二日間はどうとうと眠り、食事も摂れずにいた。それから点滴をしながら二週間、ほとんど寝たきりで過ごし、少しずつリハビリを始め、ようやく自宅に帰れた。それでもすぐには学校には行けず、しばらく自宅で療養生活。学校に戻り、友達と会えた時は、本当に嬉しかった。

だが、まだまだ事故以前の日常は取り戻せていない。腹圧をかけると出血の恐れがあるため、吹奏楽部の練習もできず、今月末のこ

ンクールにも、もちろん参加できない。

でも、これらは全て自分が招いた失敗だ。

学校近くのいつものわき道を私が自転車が出た所で、車とぶつかった。一時停止のある道からの私の飛び出しだろうという、警察の方のお話だった。普段はあの道のある場所で止まらなかつたことはない。けれども、事故当時のことは何も覚えていない。一つ言えることは、左右の確認ができていなかったということ。これはおそらく間違いない。

生活を一変させるほどの大きなけがをしてしまった。それでも幸いだったことは、脳の損傷はあったものの比較的軽傷であり、大きな手術をする必要もなく、二週間で退院できたこと。また、今のところは後遺症もなく、少しずつ日常生活を取り戻しつつあること。これらの不幸中の幸いに、私は神様に本当に感謝している。

当たり前のことではあるが、私は必ずヘルメットをかぶり、自転車通学していた。事故の日から数日後、ヘルメットを見た。右側にも左側にも大きなひびが入っていた。きっとヘルメットが私を守ってくれたのだ。

今回の事故で、私は自分の何がいけなかつたのか、また、今後事故に遭わないために何が重要であるか考えた。

- 一つ、道路に出る時は、必ず一度止まる。
- 二つ、一度止まるだけでなく、左右を確認し、安全を確かめてから渡る。

三つ、自転車に乗る時は、必ずヘルメットを装着する。(三つめは私の命を救ってくれた。)

他にも、信号を守ることや、暗くなったら自転車のライトをつける。道路標識をきちんと確認する、という当たり前のルールがたく

さんある。そして今回の事故は、今まで当たり前前にできていたことが、当たり前前にできていなかったことを痛感した経験にもなった。

思えば私たちは、たくさんの当たり前前にある交通ルールによって、知らないうちに命を守られている。しかし、一瞬の気のゆるみや油断によって、そのルールが守られない時間が生まれる。そうして、多くの事故は起こっているのだろう。

私の事故の後も、中学生や高校生が交通事故に遭い、大けがをしたり命を落としたりしているニュースをたくさん目にする。私のように自転車で通学する全ての学生、通勤する社会人の皆さんにも、交通ルールを今一度確認し、ヘルメットの着用や左右の確認を行うことで、自分の命を守ってほしい。

今回の事故で救急車と一緒に乗ってくださった先生、入院中仕事を休んで付き添ってくれた母、自転車の修繕や保険の連絡などを今も行ってくれている父、自宅療養中に泊まり込みで世話をしてくれた祖父母、心配してくれた友人。他にもお世話になった皆さんの方々に感謝している。

私は、吹奏楽コンクールには出場できなかったけれど、元気になったら部活に戻り、もう一度クラリネットを吹きたい。二期期には体育大会も友人と一緒に楽しみたい。そしてヘルメットが救ってくれたこの命を、これからも大切にしていきたい。

命を守るため

松前町立岡田中学校

二年 渡部 花菜

「道路を渡るときには左右をしつかり確認しましょう」「自転車に乗るときはヘルメットを必ずかぶりましょう」と、交通安全教室やポスターなど、いろいろな場所で耳や目にします。そのため、聞き流してしまっている人も多いと思います。ですが、そのような小さな行動で自分の命を守ることができるのです。私は身を持ってその大切さを感じたことがあります。

私が自転車に乗れるようになったばかりの頃、新しい自転車を買ってもらい、うれしさを浮かれていました。その翌日、母と二人でサイクリングをしに行きました。細い道に入ったとき、周りに車がいなかったのに、調子に乗ってスピードを出してしまいました。母は何度も「危ないでしょ。やめなさい」と注意してくれました。それでも私は、母の注意を無視して、勢いのままに角を曲がってしまいました。その瞬間、車がすぐ近くに見えませんでした。「轢かれる」と思いましたが、車が急ブレーキをかけてくれたおかげで、幸いにも怪我はありませんでした。そのときはショックで何も考えられませんでした。しばらくして凄まじい恐怖に襲われました。今でも交差点や見通しの悪い場所での出来事を思い出します。もしあのとき、車のブレーキが間に合っていなかったら、もし車や自転車のスピードが少しでも速かったら、私はどうなっていたかわかりません。大怪我をしていたかもしれないし、最悪の場合、命を落としていたかもしれない。

家族にも迷惑がかかるし、車を運転していた方は正しく運転していただけないのに、罪に問われていたかもしれません。自分だけでなく、周りの人にも迷惑がかかるのです。「もし〜だったら」を考えると本当に恐ろしくてぞっとします。それから私は、必ず交差点や曲がり角では、左右を見て車が来ていないことを確認し、ヘルメットをかぶるように決めました。

自転車は車と違って運転するために免許を取る必要がありません。なので自転車の危険性を考えず乗っている人もいます。ですが道路交通法で自転車は「軽車両」に分類されています。車の仲間として定められているのです。そのため、逆に自分が加害者になってしまう可能性もあります。前に、自転車で通勤中の男性が横断歩道を渡っていた高齢の男性をはね、死亡させたというニュースを見たことがあります。一瞬の不注意や気の緩みで人の命を奪ってしまうのです。自転車は便利な乗り物ですが、凶器にもなります。私はそのニュースを見てはっとしました。自分の自転車の乗り方を振り返ってみると、急いではときは普段より注意散漫になっていることに気づいたのです。急ぐと自然に自転車を漕ぐスピードが速まり、左右確認が十分にできなくなります。焦りは交通事故を起こす引き金となります。時間に余裕を持つと交通事故を未然に防ぐことにつながると思います。そして、自転車は歩行者よりもスピードが速いため、もしぶつかったら高確率で怪我を負うのは歩行者です。自転車は車の仲間ということを常に意識し緊張感を持って運転することが大切だと思いました。

自転車はお年寄りから若者まで、たくさんの方が多くの場面で使う、実用性の高い乗り物です。一方で、自転車の事故は数多く存在

します。私たちはその危険性を理解し、自分を事故から守る必要があります。交通事故を防ぐために、私が考えたことは三つあります。一つめは当たり前ルールを守るです。ヘルメットは必ずかぶる、左右確認を怠らないなど当たり前のこともしっかり徹底することで命を守るのです。二つめは時間に余裕を持つことです。そうすることで、落ち着いて安全確認ができます。三つめは常に車の仲間というを意識することです。この三つのことを守れば悲しい事故は減るはず。いつでも自分が危険な目に遭うかわかりません。自分は大丈夫だろうと思いついで油断してしまつたときこそ事故に遭いやすくなります。そんなときは周りの人と注意し合い緊張感を持つてほしいです。私は必ず家族を家から送り出すとき「いつてらっしやい。気をつけてね」と言います。絶対に悲しい事故に遭つてほしくないからです。それは家族だけでなくすべての人に言えることです。私はこれからも気を引き締めて正しく自転車を使い、絶対に事故に遭わない、加害者もならないことを意識して生活していきたいです。



簡単だけれど大切なこと

大洲市立平野中学校

二年 向井 希

「危ない！」
私はその光景を見た瞬間、咄嗟に声を出して、おじいさんの腕をつかんでいた。

長期休みに入る前、学校の先生は「交通事故に気を付けてください。」と言う。それを聞くと、ニュースでいろいろな事故を見るけれど、自分や自分の周りだけでだけは交通事故は起きないと思っていた私の考えは、その日から大きく変わった。

二年前春休みに入ったばかりの頃、家族にコンビニでのおつかいを頼まれた。おつかいをすませた帰り道にある最後の横断歩道、そのとき後ろを歩いていたおじいさんも同じ信号の前で立ち止まった。信号を待っている間、私はなんとなく買い物をしたレシートを眺めていた。信号は思っていたよりも早く青になつたらしく、レシートを見ていた視界に、おじいさんが横断歩道を歩いていくのが見えた。自分も渡ろうと思い、レシートを袋に入れながら顔をあげた瞬間、青に光る信号ゆつくりと歩くおじいさん、そして何より目に入ってきたのは、スピードを落とす気配のない一台の車。いつもなら車がスピードを落とす距離なのに、スピードが変わらなかつた。その一瞬の光景が私には、まるで写真のように止まって見えていた。その光景を見て、何をしたらいいのかわからなかつたが、「怖い」「危ない」という感情はすぐに出てきた。その瞬間、自分の体が勝手に動いていて、

おじいさんの腕を引っ張り、「危ない！」と叫んでいた。

「プーーツ」と長く響いたクラクションの音が鳴りやんだとき、掴んでいる腕の先にしっかりと自身の足で立って驚いた表情で瞬きを繰り返しているおじいさんを見て、すっと全身の力が抜けた。

この出来事を経験して、考えさせられたことが二つある。一つ目は、信号が青になっても車が止まってくれないことがあるということだ。

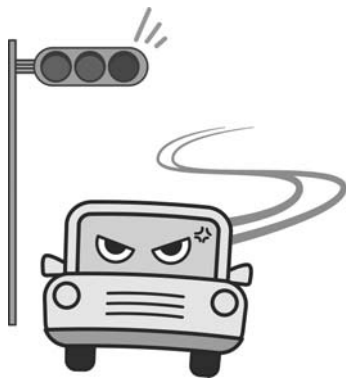
このことについてインターネットで検索してみると、最近歩行者が横断歩道を渡っていても止まらない車は増えていると感じている人が多くいるようだった。しかし、その場に遭遇してしまっているからではどうにもならない場合もある。だから、「青信号だから車は来ない」と思い込まずしっかりと左右を確認してから横断歩道を渡ることが大切だと改めて思った。

二つ目は、大人でも横断歩道を渡る際に手を挙げたほうが良いということだ。

横断歩道を渡るとき、「手を挙げてわたってね」と親に言われているのは小学校を卒業するまでだった。中学校に入ってからには言われなくなったので、そこから手を挙げているかどうかはあまりに気にしなくなっていた。しかし最近、「大人も手を挙げよう」というキャッチコピーの入ったポスターを道で何回も見かけた。気になって調べてみると、愛媛県警が独自に取り組む運動だった。さらに、手を挙げずに横断しようとした場合と、手を挙げて横断しようとした場合の車の停止率は、手を挙げなかった場合「四十三・九%」手を挙げていた場合「七十二・〇%」と、手を挙げて横断しようとしたときのほうが確実に車の停止率が高いことが分かった。

私は、県警の「大人にも手を挙げてもらおうための運動をしよう」という判断に感動し、誇りに思った。愛媛県内の信号機のない横断歩道でこの運動をしている県警はすごいと思った。また、この活動が他の都道府県にも伝わってほしいと思った。

今回、横断歩道での車と歩行者のことについての経験や、調べてみたことで、横断歩道を渡るときに交通事故にあわないよう気を付けたと思う。「横断歩道では手を挙げる」「右左右を確認する」この二つのことはほとんどの人が当たり前のように教わったことだ。しかし、大人になるにつれて横断歩道を渡るときに気にしなくなっている人もいると思う。自分の命を自分で守る行動をとり、世の中の交通事故がなくなればいいと思う。



交通事故の体験から

愛南町立一本松中学校

二年 除本 雄星

僕には苦い経験があります。それは、中学一年生のときの自転車事故です。中学生になった喜びでこれからの生活に期待を膨らませていたときだったので、けがのために思うように体を動かせなかった一か月は、つらい毎日でした。しかも、自分の注意不足が招いたことであつたうえに、一緒に帰っていた先輩も巻き込んでしまったことが僕を苦しめました。事故を起こしてからの一週間くらいは、事故の間が夢に出てくるほどでした。体も心も痛くて、消したくても消せない出来事です。

その日、学校では交通安全教室がありました。座学で交通安全について学んだ後、自転車の実技講習を受けました。だから、交通事故を起こさないうために、どういふところを気を付けなければならないのか、どんな考え方をしなければならないのかなどを学習し、自分の意識も高まったはずでした。しかし、放課後になり、一步校庭を出てしまうと、僕の意識は自分が思う以上に低下していたのです。だから、下り坂を走る僕の自転車のスピードは出ていたと思います。そのためハンドル操作を誤り転倒してしまいました。先輩はそれに巻き込まれたのです。事故直後は気が動転していて詳しく覚えていませんが、先輩が顔から血を流していたことと、先生方が駆けつけて来てくださったって応急処置をしてくださったこと、ずっと声を掛けてくださったことは記憶に残っています。現場で僕を見た周囲の人の話

では、唇が真っ青で顔は真っ白、今にも気絶してしまいそうだったといえます。その後、救急車で先輩とともに病院に運ばれました。僕のけがは、鎖骨と左足の親指の骨折でした。自分のことよりも先輩のことが心配でたまりませんでした。顔のかすり傷だったと聞き、命に別状がなかったことでほっとしました。でも、申し訳ない気持ちが消えることはありませんでした。事故を起こして以降僕が恐怖におびえ続けたように、きっと先輩もその一瞬がフラッシュバックし続け、眠れない日々を過ごしたに違いありません。心配でたまりませんでした。だから、学校で先輩に、「かすり傷やけん、気にすんな。おまえは大丈夫か。」と声を掛けてもらったときは、涙が出そうになりました。そして、改めて申し訳なく思うとともに、先輩の優しさが身に沁みました。僕が乗っていた自転車は、前輪が九十度くらいに曲がっていました。これが先輩でも僕でもなかったことに感謝しました。

あの事故から、もう一年数か月が経ちました。今でも時々事故のことを思い出します。思い出すことが、自分自身の戒めになっています。ややもすると、雰囲気の流れ、つい調子に乗ってしまう僕の心のブレーキです。事故後、道路交通法について調べてみました。多すぎて記憶するのは難しいですが、特に、自分に関係するものだけは頭に入れておきたいと思いました。そこで、現在、僕が注意していることの一つは、命を守る行動です。過去の事故では、僕と先輩の命は守られましたが、多くの人たちに迷惑や心配をかけました。誰も悲しませないためには、命を守ることが一番です。二つ目は、安全なスピードでの走行です。危険を感じたらすぐに止まることができるところを、安全の目安にしています。「遅いくらいが丁度いい。」が合言

葉です。三つ目は、周囲の状況を十分に確認することです。自動車や歩行者、天気、僕と一緒に行動している人たちがそれにあたります。誰かと一緒に自転車で走っていると、楽しさから気持ち緩んでしまいます。そうならないための適切な判断をしなければならぬと思っています。それには、確認することが大切だと思います。

僕が迷惑をかけた先輩は中学校を卒業しました。今、僕は、新しい仲間と登下校をしています。僕が交通ルールを守り、安全な自転車の乗り方をするのが、交通事故防止につながり、みんなが楽しい学校生活を送ることができると思っています。



二つの視点から見て気付いたこと

四国中央市立川之江南中学校

三年 高橋 和夏

私は自転車に乗って通学している。スピードを出しすぎたりせず、歩行者にも気を付けながら安全運転を心がけている。

しかし、自分がきちんとルールを守っていても思わぬところで事故に巻き込まれてしまう可能性があるということに気付かされる出来事があった。

朝の登校時に横断歩道を渡ろうとしていた時の事だ。歩行者側の信号が青に変わったので渡り始めたところ、右側から左折してきた車ともう少しでぶつかりそうになってしまった。車が急ブレーキを踏んで、ぎりぎりのところでぶつからなかったが、怖くてしばらく心臓がドキドキしていた。相手の運転手もとても驚いた顔をしていたのでお互い怖い思いをしたと思う。

青信号で渡っていたのだから車側が悪いとばかり思っていたが、ある日母に車で送迎してもらった時に気付いたことがある。それは先日のように左側の後方から出てくると、車側からは死角になって見えにくいということだ。自転車側は自分の存在に気付いてくれているだろうと思っても、車側からは思っていた以上に見えにくく巻き込み事故につながりやすいのだ。私とぶつかりそうになった車の運転手も、全然私に気付いておらずきつと死角から急に飛び出したような感じになっていたからあんな驚いた顔をしていたのだろうと想像できた。

自転車側からと車側からの両方の視点から見ると、自分に気づいてくれているであろうとか、相手が止まってくれているであろうとか、〇〇であろうの気持ちで油断する気持ちが事故につながるのだと思った。もしかしたら自分に気づいていないかも、止まってくれないかも、もしかして〇〇かもと考えることで防げる事故があるのではないかと思う。

また、万が一事故にあってしまった時、命を守ってくれるのはヘルメットだ。暑いとヘルメットをかぶるのが億劫になってしまうが、故にあつてから後悔しても遅いのだ。私が車とぶつかりそうになった話を母にすると、「無事でよかった。何かあつたら、家族みんなとてもつらい。」と言っていた。私にとつても家族にとつても命は一つでとても大切なものなのだ。そんな大切な命を交通事故で奪われてしまうことがあつてはならない。

そして、自転車に乗っている以上、自分が加害者になってしまう可能性もある。自分がケガをするのもつらいが、それ以上に加害者になつて相手をケガさせてしまうこともとてもつらいと思う。ルールを守ることはもちろんだが、もしかしたら〇〇かも、と想像しながら運転するように心がけたいと思う。

「なぜ？」を考える

西条市立西条東中学校

三年 河野 壮一郎

僕は最近、「クロスバイク」にハマっている。自宅から片道七〇kmもある香川県の金刀比羅宮まで一人で行ったこともある。風を切つて走るととても自由を感じる。最近ロードバイクにも興味湧いてきた。インターネットでいろいろ調べる内に、ロードバイクの世界には「自動車や原付の前に出たり、走り出しのときにそれらより先に走り出したりしない。」とか「信号待ちで並んでいる他の車両を追い抜かない。」という暗黙のルールがあることを知った。法で定められているわけでもないのに、みんなが必ず守っているらしい。

なぜ？自転車はあの風を切る自由さがいいのに。別にそのようなルールがなくても気持ち良く走れるのに。なんでわざわざルールで縛り付けるのだろうか？でも、まあいい。僕は僕で自由にやろうと思いつつながら、僕はクロスバイクに乗り続けていた。

さて、僕はテニス部に所属している。放課後はいつも学校から三kmほど離れた市営のテニスコートまで移動して練習をする。コートまでの道には住宅街やスーパーマーケットがあり、いつもたくさん自動車が自転車が行き交っている。先生からも何度も「気をつける。」と注意されたことがあるのだ。

五月のある日、僕はいつものように通学用の自転車に乗ってテニスコートに向かった。その日も交通量が多く、コートまであと一五〇mほどのところで、何台もの車が信号待ちの長い列を作っているのが見

えた。車の左側には自転車一台くらいなら通れるくらいのスペースがあった。「信号待ちで並んでいる他の車両を追い抜かない。」少しだけあのロードバイクの暗黙のルールが頭をよぎった。でも、誰かが勝手に作ったルールだし……僕は車の横をすり抜けることにした。何台かの車の横をすると通り抜けた。ところが、である。あと三台で前に出られるというところで、前かごに入れていたラケットがある車のサイドミラーに当たってしまった。ハンドルよりも右側にはみ出ていたからだ。「しまった。」と思ったが手遅れだった。

僕は近くの広場に誘導された。車から降りてきたのは、放課後デイスービスの会社の方だった。その方はまず会社の上司の方に電話をかけた。僕もその方の電話を借りて母に電話をかけた。警察官もやってきた。デイスービスの上司の方も部活の顧問の先生もやってきた。

デイスービスの上司の方は、まず、乗っていた子供たちの無事を確認し、それぞれの子の保護者の方と連絡をとり、先に連れて帰っていただくように手配した。顧問の先生は教頭先生に連絡をした。しばらくしてやってきた副顧問の先生に、「コートの中の部員をおねがいします。」と伝え、僕と一緒に現場検証に立ち会った。母は、自分の仕事を誰かにお願いする手配をしてから少し遅れて来た。僕の無事を確認した後、警察の人やデイスービスの人とのやりとりで忙しく動いた。

警察官はてきぱきと事情聴取や現場検証を行い、車が完全停止をしていたことを確認し、「君に一〇〇%の責任がある。」と告げた。すべての手続きが終わるまで、僕はただ呆然と見ていることしかできなかった。僕の少しの油断が、これほどの人に影響を与えたこ

とへの大きな後悔とともに、相手の方は穏やかに僕を許してくださいだったが、僕の心は自分を責める気持ちでいっぱいだった。

全てが終わり、家に帰って考えた。多くの人の時間を奪い、心配と迷惑をかけたことへの後悔はもちろんだ。しかし、特に思い出されたのが、あの「信号待ちで並んでいる他の車両を追い抜かない。」という暗黙のルールだ。あのルールはこのような事故を経験した「誰か」が「同じような事が起こらないように」という気持ちで作ってくれたのではないか。僕はもう一度絶望した。

僕はルールが嫌いだ。僕たちを縛るものだと思っていた。交通ルールだってそうだ。自転車でも走らなければ、友人と楽しく話しながら登下校ができるのに……。

しかし、この事故で、僕は「誰か」が決めたこの世の中にあるルールには、確かな「意味」があることを理解した。特に、交通安全のための法やルールは命に直結するものだ。ルールは僕たちの命や安全で豊かな暮らし、世の中の秩序を守るために作られているのだ。だからこそ、「このルールがなぜあるのか？」を考えることは、いつ起こるかかわからない事故を予防することにつながる。そうして、自分を含めたみんなが笑顔で安全に暮らす未来が守られていく。

これからも僕は自転車に乗り続けるだろう。しかし、今までの僕とは違う。ルールを守って安全で楽しい最高の自転車ライフを送ってほしい。何より、「なぜ？」を考えることで、みんなの安全を守ってほしい。僕は決めた。

安全を守るために

愛媛大学教育学部附属中学校

三年 齋藤 瑚

毎週火曜日、私が習い事から帰るのは、すでに周りが暗くなっている時間帯だ。父からはいつも、

「暗いから、車や自転車には気をつけてね。」

と言われていたものの、心の中では、自分は大丈夫だろうと思いついでいた。しかし、違った。ある日の、交差点での出来事だ。信号が青に変わり、横断歩道に足を踏み出した瞬間、左から走ってくる自転車と危うくぶつかりかけたのだ。今までほとんどヒヤリとした経験がなく、とても驚いた。私は、なぜきちんと歩行者がいないか確認しないのだろうか、と少し苛立ちを覚え、帰宅するなり父にそのことを話した。すると父は私の服装を見て、「これからは、夜に外出するときは服や鞄に反射材を付けなさい。」

と言った。服に付ける反射材もあるのか、と驚いた。なぜなら、私は今まで、反射材は自転車に付けるためのものだと思っていたからだ。自分の自転車にはきちんと反射材を付けているが、普段はほとんど自転車で乗らないため、反射材の存在を忘れていた。反射材には再帰性反射という性質が備わっており、自転車や自動車などのライトの光が当たると、そのまま光源の方向に光が反射する仕組みで光るのだそうだ。そのため、自転車だけでなく自動車にも、より遠くまで自分の存在を知らせることができる。ファッションに馴染むようなも

のや、気軽につけられるキーホルダータイプの反射材もあるらしい。これなら私にもすぐに実践出来ると思い、早速次の習い事の日から靴と鞄に反射材を付けて行くようにした。すると、反射材を付けるようになってからは、危ないと思う瞬間がなくなった。そして、あとき自転車とぶつかりそうになったのは、自転車で乗っていた人が注意していなかったのではなく、自分の服装に原因があったのだと気づいた。私は、相手にばかり非があると思いついていたことをとても申し訳なく思った。一方で自分の周りの人の中では、反射材を付けて外出するようにしている人がどのくらいいるのだろうかと疑問を持った。そこで、習い事の帰り道に、周りの人の交通事故対策を見ながら帰ることにした。

夜は昼間に比べると見かける人の数は少ないものの、ペットと散歩を楽しんでいる人や自転車に乗って買い物に行っている人など、様々な人と会う。中には私と同じように反射材を付けている人もいた。思ったより遠くからでも相手の位置を認識できて驚いた。しかし、反射材を付けている人とすれ違ったのは一回だけだった。まだ反射材を付けることが浸透していないことを実感した。

たくさんの人とすれ違ううちにふと気づいたことがあった。着用している服の色でも、見え方が違うということだ。蛍光色や白色などの明るい色の服を着用している人は少し離れたところからでも認識できるが、黒っぽい服を着用している人は近くにいっても見づらかった。服の色が違うだけで、こんなにも見え方が違うということを初めて知り、夜に外出する際は着用する服の色にも気を配ろうと思った。遠くからでも見えやすい服装を心がけることで、自転車や自動車との事故の可能性を低くしていきたい。

夜は交通事故が起こる確率が大きく上がる。しかし自分だけが気をつけても、夜間の交通事故は減らない。加えて夜に反射材を付けて外出するようにしたり、なるべく明るい色の服を着て出歩くことを心がけていると感じた人は、まだまだ少数だった。周りの人にも反射材を付けることを勧めるにはどうしていけばいいのだろうか。私はまず、一人一人の意識を変えていくことが必要だと考える。反射材を付けることは決して恥ずかしいものではない、ということをもっとたくさんの人に伝えていくために、自分から積極的に反射材を付ける姿を家族や友人に見せようと思った。そうすることで、反射材を付けることを多くの人に広めていきたい。

反射材を付けることは自分の命を守り、自転車や自動車との事故を減らすことにつながる。自転車や自動車を運転する人も交通ルールを遵守することは大切だが、どれだけ気をつけていても事故を起こしてしまうときはある。そういった場面に遭遇した際には、お互いが、交通事故を防ぐためにどんなことができたろうかと考え、実行することが必要だと学んだ。事故が起きるときはいつも自分が被害者だとは限らない。自分の至らなかつた点を考えて、より気をつけるようにならないといけないと思う。何かあつてからでは遅いという意識をみんなが持つような世の中にしていきたい。

交通事故はすぐそばに

久万高原町立久万中学校

三年 村上 一花

ニュースや新聞では、毎日のように車の交通事故などのニュースを目にします。悲しいなと思つても、いつも私はどこか他人事で、自分には関係ないと思つていました。でも、ある日、命の危険を感じるような体験をして、事故の怖さを知りました。

私は毎日、徒歩で学校に通つています。中学三年生の春、横断歩道を渡ろうとしたとき、スピードを落とさずに左折して来た車に、ひかれそうになったことがあります。一緒に登校していた友達のバッグに車が当たり、もう少しで大事故になるところでした。車を運転していた人は謝ってくれましたが、もしかしたら、謝つても許されないことが起こつていたかもしれません。

この出来事があつて、家族に交通事故を起こしたことがあるか聞いてみました。父、母、祖父、祖母に話を聞いたところ、なんと全員が交通事故を起こした経験がありました。まさか、身近な家族全員が交通事故を起こしたことがあるとは思つていなかったのです。とても驚きました。自分の不注意で起こした事故、相手が原因で起きた事故、内容は様々でした。

なかでも一番衝撃だったのは、父の交通事故です。免許を取りたての十八歳のころ、父は新しく買った車でドライブするのが好きだったそうです。雨が降つたある日、父が友人とドライブしていると、カーブでスピードを出し過ぎて、ガソリンスタンドに衝突したそうです。

後部座席に乗っていた友人は、事故の衝撃で窓から外に投げ出され、後部座席はペシャンコにつぶれてしまったそうです。幸い父も友人も命に別状はありませんでした。でも、もしかしたら命をなくしていたかもしれない。この事故が原因で、取ったばかりの父の運転免許は取り消されてしまいました。

もし父が友人の命を奪っていたとしたら、刑務所に行っていたかもしれないし、父の人生は大きく変わっていたことでしょう。いつどこで、だれが事故を起こすかわかりません。私は、あと三年もすると運転免許を取得できる年齢です。免許を取ったら、好きなどころに出かけたり、誰かとドライブを楽しんだり、楽しむことがたくさんあります。でも、運転をするということは、いつどこで加害者になるかわからないということでもあります。一つの出来事で自分の人生が変わってしまうことがあるので、細心の注意をはらいたいと思います。

人生が変わるといって、母の交通事故の話も衝撃的でした。母が私を妊娠していたころのことです。車を運転していると、対向車線を走っていた車が、母の車に衝突したそうです。事故の直前、相手の運転手が目をつぶっていたのが見えて、母はとても怖かったそうです。相手の運転手は持病の薬を飲んでいて、一時的に眠くなり、居眠り運転をしたことが事故の原因でした。母はお腹の中の私が無事かどうかをとて心配したそうです。幸い母もお腹のなかの私も命に別状はなく、私は無事に生まれることができました。もし母が亡くなっていたら、私もこの世にはいませんでした。

自分がいくら注意していても、突然事故に襲われることがあります。いろいろな偶然や不注意が重なって、事故が起きることがあり

ます。自分が生まれていなかったかもしれない、もしかしたら将来自分が誰かの命を奪うかもしれない、そう考えると、本当に怖くなりました。

今までの自分は、交通事故なんて関係ないと思っていました。しかし、今回家族の話聞いて、いつでもどこでも、誰にでも起こる可能性のあることなのだとわかりました。少し調べてみると、中学生や小学生が加害者になっている交通事故の事例がたくさんありました。なかには、自転車に乗った小学五年生の少年が六十歳代の歩行者と衝突し、九千万円以上の賠償金を背負うことになった事件がありました。まだまだ私は大丈夫、加害者にはならない、こう思っています。

父や母が、交通事故で命を落としていたら、今の自分は存在していません。今改めて、命の大切さを実感しています。だからこそ、今まで以上に交通安全に気をつけて、命を大切に生活していきたいです。



交通事故を身近に捉えて

松野町立松野中学校

三年 細川 花音

みなさんは、「交通事故」ときいて何を思うだろうか。危険な目に遭ったことがあるという人は事故がどれほど恐ろしいものか分かると思う。しかし、実際事故を自分事として考えていない人が多いと思う。私も普段、車もバイクも自転車も運転しないため、事故について深く考えたことはなかった。しかし二年前、交通事故を身近に感じた出来事があった。

私の祖父は、いつも朝早く起きて、畑仕事をしたり、同じように早起きしている近所の知り合いの人と話したりしている。その日も朝早く起きて軽トラックを運転していたところ、交差点でダンプカーと衝突する事故に遭ってしまった。幸いにも、軽いけがですんだものの、命を落としていてもおかしくないほど車も壊れていて、「もしも……」と考えると怖かった。「あのじいじが？」と思った。自分や身近な人が危険な目に遭って初めて気付くこと、分かることがあると思う。交通事故は怖い。

毎日のように交通事故のニュースを見る。一日に何件もの交通事故が起きていることが分かる。昨年の全国交通事故件数は三十七万七千九百三十件となっており、一昨年より七千九百一十一件増加している。調べた結果、一年でこれだけの人が交通事故に遭っていることが分かった。この現状に関心を持たず、交通事故を身近なものとして考えていない人がたくさんいると思う。交通事故が起こってし

まってからでは、遅い。自分だけでなく、周りの人を守るためにも、ルールを守り、安全運転を心掛けることが大切だ。

私の住んでいる町では、昨年、交通死亡事故ゼロ三千日を達成した。町での取組として、運転免許証を自主的に返納した六十五歳以上の方に対して、コミュニティバスの運賃を全額免除とする支援のほか、高齢者に対する後付け型の安全運転支援装置の購入補助などを行っている。このような町の取組が死亡事故ゼロ三千日達成につながっているのではないかと思う。このような取組が町全体に広がっていけば、日本一交通死亡事故が少ない県として名を揚げることができると思う。町民や県民全体の「交通事故」への意識が変わることで、何人もの命を救うことができるのだ。死亡事故だけでなく、交通事故ゼロの町を目指し、事故によって辛い思いをする人を少しでも減らしていきたい。

私はもうすぐ高校受験を控える中学三年生だ。進学する高校にもよるが、通学には鉄道を使うことになる。汽車の事故は少ないと思うが、甘く見ず、十分に注意して利用したい。実際に、人がはねられる事故やブレーキが利かず車が横転する事故など様々な事例がある。また、それにより多くの人が亡くなっていることも事実だ。気を付けようがないこともあるかもしれないが、いざという時のことも考えて行動したいと思う。

「人生何が起るかわからない。」本当にその通りだ。地震による災害、病气やけがなど、いつ、どこで起るかわからないことがたくさんある。交通事故も、そのうちのひとつだ。「まあいいか。」「大丈夫だろう。」という油断が、命を奪う重大な事故につながる。地震を防ぐことはできないが、対策を考えることはできるように、運転も、

普段から「かもしれない運転」を心掛けておくことが大切だと思う。時間にも心にも余裕を持った行動を大切にすれば、落ち着いて運転できるはずだ。事故は時には、私たち同年代の子、もしくは私たちより幼い子たちの命を容赦なく奪ってしまう。事故は、当事者だけでなく、周りにとっても悲劇である。だからこそ、交通事故を身近に捉え、普段から意識しておくことが大切なのだ。



自転車にTSマークを貼いましょう！！

◇ TSマークには、保険が付いているので安心

プロの手による自転車の点検・整備が受けられて安全!

TSマーク付帯保険は所有者以外の方も対象になります! (家族・友人・従業員等)

TSマーク付帯保険金の請求の流れ

事故発生 → 事故の届け出 (110番又は最寄りの交番・警察署) → 保険金請求手続きのご案内 (三井住友海上火災保険株式会社 事故受付センター (24時間受付) 0120-258-189) → 事故発生連絡

事故が発生した場合は、速やかに最寄りの警察署へ届けるとともに、必ず三井住友海上火災保険株式会社事故受付センターへ連絡をして下さい。

TSマーク付帯保険の補償内容	赤色 TS マーク	緑色 TS マーク
賠償責任保険 (被害者が死亡等した場合に、法律上の損害賠償責任を負った時の補償)	○死亡・重度後遺障害 (1～7級) 限度額 1億円	○死亡・障害 (すべての人身事故) 限度額 1億円 示談交渉サービス付き
傷害保険 (自転車利用者が死傷等した時の補償)	○入院 15 日以上 10 万円 ○死亡・重度後遺症 (1～4 級) 100 万円	○入院 15 日以上 5 万円 ○死亡・重度後遺症 (1～4 級) 50 万円
被害者見舞金 (被害者が入院した時の見舞金)	○入院 15 日以上 10 万円	○入院 15 日以上 賠償責任補償により対応

思いやり1.5m運動の実践を！



愛媛県では、「愛媛県自転車の安全な利用の促進に関する条例」の基本理念として、歩行者・自転車・自動車等がお互いを思いやり、安全・快適に道路を共有する「シェア・ザ・ロード」の精神の普及に努めており、ドライバーの皆様には、自転車を追い越すときの事故防止のため、「思いやり1.5m」運動の実践を呼びかけています。

ドライバーの皆様は、自転車の側方を通過するときは1.5m以上の安全な間隔を保つか、道路事情等から安全な間隔を保つことができないときは徐行していただきますようお願いいたします。

交通安全協会のご紹介

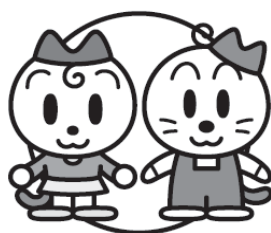
① 一般社団法人 愛媛県交通安全協会

松山市勝岡町1163-7 電話：089-979-2101

ホームページ：<https://www.ehime-ankyou.or.jp/>

② 各地区交通安全協会一覧表

協会名	所在地	電話番号
宇 摩	四国中央市三島中央5丁目4-20	0896-23-5331
新 居 浜	新居浜市久保田町3丁目9-8	0897-32-3260
西 条	西条市新田133-1	0897-55-9911
西 条 西	西条市周布349-1	0898-64-1661
今 治	今治市旭町1丁目4-2	0898-33-3466
伯方地区	今治市伯方町木浦甲4639-1	0897-72-2911
松 山 東	松山市勝山町2丁目13-2	089-941-7810
松 山 西	松山市須賀町5-36	089-951-1725
松 山 南	松山市北土居3丁目6-17	089-958-6558
久万高原	上浮穴郡久万高原町久万542-4	0892-21-0211
伊 予	伊予市下吾川960	089-982-7081
大 洲	大洲市東大洲1686-1	0893-25-0334
内 子	喜多郡内子町内子1432	0893-43-0116
八 幡 浜	八幡浜市広瀬2丁目1-5	0894-24-4895
西 予	西予市宇和町卯之町4丁目659	0894-62-9676
宇 和 島	宇和島市並松2丁目1-30	0895-23-0027
鬼 北	北宇和郡鬼北町大字芝225-1	0895-45-0277
南 宇 和	南宇和郡愛南町御荘平城2982-2	0895-70-1311



あんきょう

愛媛県交通安全協会・各地区交通安全協会

交通安全年間スローガン最優秀作

○ 子供の部門（小・中学生からの応募）過去十五年間の内閣総理大臣賞

平成	二十三年	星キラリ 自転車ピカリ 帰り道
同	二十四年	いそいでも かならずかくにん みぎひだり
同	二十五年	ヘルメット ぼくのだいじな おともだち
同	二十六年	につぼんを じまんしようよ 事故ゼロで
同	二十七年	ルールむし しん号むしは わるいむし
同	二十八年	しんごうが あおでもよくみる みぎひだり
同	二十九年	ペダルこぐ 免許はないけど ドライバー
同	三十年	自転車は 車といっしょ 左側
同	三十一年	とび出さない いったんとまって みぎひだり
令和	二年	しつかりと 止まってかくにん 横だん歩道
同	三年	自転車に 乗るならきみも 運転手
同	四年	とうげこう よそみ おしゃべり きけんがいつぱい
同	五年	ぺだるこぐ ぼくのあいぼう へるめつと
同	六年	わたるまえ わすれずかくにん みぎひだり
同	七年	青だけど 自分の目で見て たしかめて

～ 愛媛県交通安全協会ホームページ 広告協賛事業所 ～

【四国中央市】

金生運輸(株)
大王製紙(株)
丸住製紙(株)

【新居浜市】

一宮運輸(株)
(株)大石工作所
桑原運輸(株)
住友化学(株) 愛媛工場
住友共同電力(株)
住友金属鉱山(株) 別子事業所
住友重機械工業(株)
愛媛製造所新居浜工場
宝運送(株)
東予信用金庫
日泉化学(株)
(株)三好鉄工所

【西条市】

(株)田窪工業所

【今治市】

(株)IJ C
今治造船(株)
今治ヤンマー(株)
四国ガス(株)
四国通建(株)
四国陸運(株)
瀬戸内運輸(株)
太陽石油(株) 四国事業所
波止浜興産(株)
BEMAC(株)
真鍋造機(株)

【松山市】

あいおいニッセイ同和損害保険
(株) 愛媛支店
アカマツ(株)
アサヒビール(株) 西四国支店
(株)アテックス

アトムグループ

(株)アベホンダHonda Cars 松山北
池田興業(株) 四国支店
(株)ISEKI M&D
(株)伊予銀行
NTT西日本 四国支店
(株)愛媛銀行
(株)愛媛CATV
(一社)愛媛県警備業協会
(一社)愛媛県指定自動車教習所協会
(一社)愛媛県自動車整備振興会
愛媛県二輪自動車協同組合
愛媛県遊技業協同組合
愛媛自動車販売協会
(株)愛媛新聞社
愛媛信用金庫
愛媛総合警備保障(株)
愛媛ダイハツ販売(株)
えひめ中央農業協同組合
愛媛トヨタ自動車(株)
愛媛トヨペット(株)
愛媛日産自動車(株)
オオノ開発(株)
岡田印刷(株)
(株)門屋組
(株)ガリレオコーポレーション
(株)かんぼ生命保険
(株)北四国警備保障
こくみん共済 coop 愛媛推進本部
(株)志's Corporation
(株)Gio 松山営業所
JA共済連 愛媛
JAバンクえひめ
四国電力(株) 愛媛支店
四国名鉄運輸(株)
四国旅客鉄道(株)
JAF愛媛支部
(株)SHINWA
(株)スズキ自販松山
(株)セキュリティエヒメ
(一社)全国道路標識・標示業
四国協会 愛媛県支部
全国農業協同組合連合会
愛媛県本部
(有)大豊陸送

(株)たいよう共済 愛媛支店
(株)タカラレーベン
帝人(株) 松山事業所
(株)テレビ愛媛
東京セフティ(株)
トヨタ L&F西四国(株)
(株)トヨタレンタリース西四国
日本郵便(株) 四国支社
フェイス・ソリューション・
テクノロジーズ(株)
(株)フジ
(株)フジセキュリティ
(株)フードサポート四国
ヨシケイえひめ
三浦工業(株)
(株)村上モータース
(株)四電工 愛媛支店

【伊予市】

旭警備保障(株)
マルトモ(株)

【伊予郡松前町】

東レ(株) 愛媛工場
日章(有)

【東温市】

(株)ヒカリ

【伊予郡砥部町】

(医) 誠志会 砥部病院

【大洲市】

(株)一宮工務店

【八幡浜市】

(株)サンリード
八水蒲鋒(株)
堀田建設(株)

【宇和島市】

宇和島自動車(株)
宇和島信用金庫

令和6年12月1日現在 100事業所

交通安全活動を支援しています。



一般社団法人
愛媛県交通安全協会
Ehime Traffic Safety Association

〒799-2661 愛媛県松山市勝岡町1163-7

TEL: 089-979-2101